プロジェクト イン 高岡

企業の新しい取り組み

高岡のものづくり400年の歴史がそうであったように、高岡では常に新商品の開発に取り組んでいる。そして、その形はさまざま。意欲的に取り組む2つの事例を紹介する。

Designer × Maker　デザイナーの発想にメーカーが呼応する

case 1

株式会社 二上　大治将典

鋳肌のままで、心をつかむ

生まれたままの鋳肌の風合い。時の経過とともに変わっていく色合い。それが、真鍮の生活用品の新ブランド「FUTAGAMI」の魅力である。

株式会社二上の社長、二上利博さんと、デザイナーの大治将典さんが出会ったのは、平成20年の県のワークショップでのこと。何か新しいものに挑戦したいと考えていた二上さんと、真鍮で栓抜きをつくりたいと考えていた大治さんの思いが一致した。

大治さんが考えていたのは、磨かない、鋳肌のままの製品だった。

「それは高岡では、半製品的なイメージでした」と、大治さんは語る。

しかし、鋳肌のまま商品にする方が、実は難しく技術がいる。二上さんは、大治さんに応えて試作品をつくった。

「形、サイズ、地金の配合。いろいろ変えて相当な数をつくりました」。大治さんは、「見た目の形に加えて、手に持ってしっくりくるような、『重量のデザイン』が難しかったですね」と話す。

ロゴデザインなども大治さんがディレクションし、6か月の開発期間で、平成21年の「インテリアライフスタイルショー」に出展。「オールアバウトスタイルストアアワード」という特別賞を受賞するという快挙を成し遂げた。

「これまでは磨き上げたものがいいとされてきた。『素地の真鍮』という新しい方向で商品展開できたことが大きいと思います」と二上さんは語る。

平成21年のインテリア・ライフスタイルショーに出展した栓抜き「日食」（上）。
完成に至るまで、アールの微妙なバランスや、楕円の形を変えるなど、さまざまな試作品を制作して検討した（下）。

平成22年に発表したペンダントランプ「明星」

おおじ　まさのり
大治 将典

1974年広島県生まれ。97年広島工業大学環境デザイン学科卒業。建築設計事務所、グラフィック事務所を経て、99年「msg.」を設立。2007年「Oji & Design」に社名変更。

一緒にいて感覚を共有する

二人は、その後も継続して新商品を開発・発表している。大治さんは、毎月高岡を訪れて、二上さんと話し合いをしているという。

「感覚を共有するために、一緒にいて話すことが大事。ファックスで終わらせるようなことはしません」。

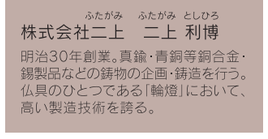
また、お互いに活かしあっているか、確認しながら進めているという。

「メーカーがつくりたいと思うもの、技術を活かせるものを提案したい」と、大治さんが言えば、二上さんは「自分たちの技術で応えられることは、100%やりたい」と話す。

「デザインは、使い手とつくり手が仲良くなるための手段」という大治さん。「FUTAGAMI」でつくりたいものは、まだまだたくさんあるという。

「これからは、大きな展示会ではなく、小さくても理解を深めてもらえる展示会に出展していきたい」と、二上さん。

本音の話し合いから始まったブランド開発。真鍮の鋳物商品の概念を変え、さらに可能性を模索し続けている。



ふたがみ　ふたがみ　としひろ
株式会社二上　二上 利博

明治30年創業。真鍮・青銅等銅合金・錫製品などの鋳物の企画・鋳造を行う。仏具のひとつである「輪燈」において、高い製造技術を誇る。

［問］株式会社二上　〒933-0951　高岡市長慶寺1000　TEL.0766-23-8531　FAX 0766-26-5614
「FUTAGAMI」ホームページ　http://www.futagami-imono.co.jp

Producer × Creator　地元クリエーターの力をプロデュース

case 2

株式会社 関菊　SHIMOO DESIGN　中山真由美

住まいの中の精神的な空間

「仏壇は、生きている人間のためのもの。自分を安心させるものなんです」と、株式会社関菊の社長、関秀道さんは語る。時代が変わろうと、住まいに精神的なスペースは必要だと考える関さんは、新しい形の仏壇を開発しようと考え、制作をシモオデザインに依頼した。

「あなたが、家具作家としてつくるなら、どんな仏壇をつくりますか？」

下尾和彦さんは、当初、「果たして自分たちがつくっていいのか」と思ったという。かつて母親を亡くした時、自分たちで家具調仏壇をつくったが、仏壇の決まり事に違和感も感じていた。

そこで、「『決まり事にとらわれず、どんな宗教の人でも家に飾れる、家族のための家具はどうですか』と、関さんに返答したんです」と、さおりさん。関さんは、その提案に「いいですね」と、すぐに承諾した。

せきぎく　せき ひでみち
株式会社関菊　関 秀道

明治41年創業。仏壇・仏具などの宗教用品、美術工芸品の製造・卸を行う。
代表取締役社長の関秀道さんは、産地プロデューサーとして、商品開発に取り組む。

シモオ　デザイン
SHIMOO DESIGN　八尾町在住

下尾和彦と下尾さおりによるデザインユニット。「美しい道具」をコンセプトに、木製家具などのデザイン・制作を行う。工芸都市高岡クラフトコンペグランプリなど受賞多数。

高岡でしか、できないものを

シモオデザインが考える祈りの家具に、関さんは、「高岡の特長となるものを加えよう」と、提案。金工の澤田健勝さんや着色の折井宏司さんなどが参加した。そうして、いくつかのアイテムができていき、平成21年のインテリア・ライフスタイルショーに出展。この時、より家具に近いものを制作した下尾さんは、それらに「縁具（えんぐ）」と名付けた。「『仏壇』に代わる名前を、いろいろ考えた結果です」と話す。

なかやま　まゆみ
中山 真由美　高岡市在住

有限会社FINE PROJECT、アートディレクター。CI、VI、ポスター、パッケージなど幅広い実績がある。富山ADCグランプリ、富山県デザイン展グランプリなど受賞。

ブランディングは、中山真由美さんが担当した。「ロゴのデザインは、二人がつくる家具の独特な形がモチーフとなっています。縁具を撮影する家も、あちこち探しました」。ロゴは、下尾さんと何度も意見を言い合って完成。パンフレットのサイズや印刷も吟味した。

「関さんには、地元の作家を育てようという心があり、ほとんど任せていただきました。下尾さんとのやりとりも、刺激的なんです」と中山さんは話す。

シモオデザインの二人も、「考える幅が広がった」「すごく新鮮で、相乗効果もありますね」と語る。

関さんは、かつて東京のデザイナーに依頼したこともある。「クリエーターは、有名かどうかより、独自の哲学を持っているかどうか。高岡のために、地元で出会えたらと思ったんですよ」。

キーワードは、「みんなで考える」。縁具は、この「祈」のアイテムのあと、「喜」や「結」のアイテムも制作する予定だ。

「いろんな人を巻き込んで進んでいきたい」と、下尾さん。これからも新しい「縁」がたくさん待っているに違いない。

縁
engu

写真の撮影は、下尾さんの友人の家などで行った。
写真左上／TOKOTOWA（とことわ）
左下／REN（蓮）
右／パンフレット

［問］株式会社 関菊　高岡市昭和町3-1-10　〒933-0946　TEL.0766-21-1313（代）FAX 0766-25-2633
「関菊」ホームページ　http://www.sekigiku.co.jp/